

移動と事前評価がマイノリティ感・ マジョリティ感に与える効果^{*1,1),2)}

岡本卓也^{*2}・佐々木薫^{*3}・藤原武弘^{*4}

問 題

マイノリティ・マジョリティに関する研究は、Asch (1951) のマイノリティのマジョリティへの同調実験に始まり、マイノリティの一貫した態度がマジョリティの態度を変容させるとしたマイノリティ・インフルエンスの研究 (Moscovici, Lage and Naffrechoux, 1969; Moscovici and Personnaz, 1980) など、古くから行われてきた (Maass and Clark, 1984)。そして、Latané and Wolf (1981) はこれらの異なる研究事例を社会的インパクト理論 (social impact theory) として体系的にまとめた。そこでは社会的影響を、影響源の強度 (strength: 地位・勢力・能力など)・近接性 (immediacy: 空間的・時間的な距離の近さ)・集団成員の数 (number of members) の各変数の関数として説明できるとしている。

これらに代表されるマイノリティ・マジョリティに関する社会心理学的研究は、影響力の指標として、マイノリティのマジョリティに対する同調の程度 (Asch, 1951; Deutsch and Gerard, 1955など) や、一貫したマイノリティ意見へのマジョリティの態度変容 (Moscovici, Lage and Naffrechoux, 1969; Wolf, 1979など)などを主な従属変数にしている。そこでは、客観的な影響力の程度を中心に議論しており、成員の心理的側面については詳細に分析されていない。本研究の目的は、従来のマイノリティ・マジョリティの研究に欠如していた主観的側面を加えて、集団間関係形成の際のマイノリティ・マジョリティに関わ

る、成員の心理的過程を探ることである。

マイノリティ・マジョリティという言葉は、本来、集団中の人数の多寡によって定義されたものである (Moscovici *et al.*, 1969; 野波, 2001など)。しかし時として、集団がもつ影響力の大小、ないしはそれにまつわる両派の人々の意識の違いに焦点を当てて用いられることもある。例えば、エリートの政治力が一般大衆よりも大きいなどという場合には、エリートは数が少なくとも、その社会の中でメジャーな地位にあり、実質的にマジョリティ感というべきものを享受しているといえる。すなわち、数によらないものによって、それらの感覚を享受しているのである。

Latané and Wolf (1981) の社会的インパクト理論では、マジョリティやマイノリティの持つ社会的影響の量の決定要因として、人数の他に強度・近接性を加えている。しかし彼らが主に論じたのは、それら二つの要因を一定にした場合、人数のべき乗に比例するという議論であった。また、強度に関しては、個人の持つ特性をあげている研究は多いが (Kipling and Karen 1989; Mullen, 1985など)、集団の特性としての強度にふれたものは少ない。そこでわれわれは、このような数の規定因から離れ、主観的な側面を含めたマイノリティ感・マジョリティ感を定義し、後述する要因がそれらに与える効果を検討した。

本研究では、それぞれ次のように定義する。マイノリティ感とは、「人数の多寡にかかわらず、自集団の勢力が相手の集団よりも劣っているとい

*1 キーワード：マイノリティ感、マジョリティ感、集団意志決定

*2 関西学院大学大学院社会学研究科博士後期課程

*3 大阪樟蔭女子大学人間科学部教授

*4 関西学院大学社会学部教授

1) 本稿は、2000年度関西学院大学社会学部に提出した卒業論文「心理的マイノリティ感・マジョリティ感の実験的研究」を再分析したものである。また、本研究の一部は第42回日本社会心理学会で発表された。

2) 実験の実施にあたり寺尾智子氏に多くの協力を頂きましたことをここに記して、感謝申し上げます。

うマイノリティの特質を有していると認知する傾向」とした。それに対してマジョリティ感とは、「人数の多寡にかかわらず、自集団の勢力が相手の集団よりも勝っているというマジョリティの特質を有していると認知する傾向」とした。

これらマイノリティ感・マジョリティ感に影響を与える要因の1つとして、移動（参入）の効果を考えた。例えば、われわれが、すでに作業をしている集団のもとに向いていく際、向いていった集団は、相手のテリトリーを侵すような気持ちになり、そこにいた集団に態度や行動を合わせようとするであろう。これは、人数の差や勢力関係によるものではなく、移動することによって生起していると考えられる。これによく似た現象として、スポーツでのホームとアウェイの効果の研究がされている。Schwartz and Barsky (1977) は、チームプレイを基本とする室内スポーツにおいて、ホーム・アドバンテージ効果の力が働いており、それは主に観衆の支持によるものだと論じた。また、Brown, Raalte, Brewer, Winter, Cornelius and Andersen (2002) は、たとえばアウェイのチームの移動の距離が影響を与えるなど、多くの要因が介在し、勝利に影響を与えることを過去11年間のサッカーワールドカップの試合の分析から明らかにしている。さらに Bray, Jones and Owen (2002) はホームかアウェイかというロケーションの問題が自信や自己効力感などの心理状態に影響を与えることを明らかにしている。このようなホーム・アドバンテージ効果は、言い換えるならば、迎え入れる側のマジョリティ感、移動する側のマイノリティ感として捉えることが可能である。

また、マイノリティ感・マジョリティ感を生じさせる要因の1つとして、事前に評価の高低差がついている場面を考えた。Brown (1995) は、マイノリティがその実際の能力や勢力とは別に過小に評価され、少数派であることを理由に不当な評価、差別を受ける例を多く挙げ、その心理的過程についての研究をレビューしている。また Hamilton and Gifford (1976) は、一般的に望ましくない行動を少数集団が起こしたと誤帰属させることを実験によって明らかにしている。

このように、少数者は明確な理由なしに第三者から低い評価を与えられることが多いが、そのこ

とがマイノリティ感を形成していることが考えられる。つまり、低い評価を与えられることによって、実際には能力や勢力があるにもかかわらず、自己効力感を低下させ、実際の行動に影響を与えることが考えられる。Bandura (1995) は、ある行動に対して能力があると社会的説得を受けることで自己効力感が上昇し、その結果、より積極的に行動に関わろうとすることを、いくつかの研究例から指摘している。これらのことから、事前に高い評価を与えることは成員たちに優越感を感じさせ、低い評価を与えることは成員たちに劣等感を感じさせると考えられる。

そこで、以上のように仮定したマイノリティ感・マジョリティ感の生起と、集団間葛藤場面（ここでは集団間での意見の調整）での、マイノリティ・マジョリティに関する認知的な側面を調べるため、2つの実験を行った。実験1は、移動の効果を検討するため、以下の2つの仮説を立てた。

仮説1-1：場所を移動してきた集団は、その場にいた集団よりも、合同の話し合いの影響力が相対的に小さいだろう。

仮説1-2：場所を移動してきた集団は、その場にいた集団よりも、マイノリティ感を感じやすいであろう。反対に、その場において移動をしなかった集団は、マジョリティ感を感じるであろう。

また全体の集団になる前の事前の評価の効果を検討するため、以下の仮説を立て、実験2を行った。

仮説2-1：事前に第三者から低い評価を受けた集団は、高い評価を受けた集団よりも、合同の話し合いにおいて相対的に影響力が小さくなるだろう。

仮説2-2：事前に第三者から低い評価を受けた集団は、高い評価を受けた集団よりも、マイノリティ感を強く感じるであろう。反対に、高い評価を受けた集団は、マジョリティ感を感じるであろう。

実験1—移動要因の検討—

方法

実験参加者：大学生の54名（男性24名、女性30名）を実験参加者とし、3名から成る下位集団を18組

形成した。

手続き：実験は3つのセッションから成っていた。第1セッションでは、性別の構成比を同じくした2つの下位集団を、図1のような心理実験室AもしくはC室に案内し、まず個人で、正解のないコンセンサス課題である「スリー・テン」の問題に回答した（課題については次項参照）。つづく第2セッションでは、下位集団ごとに課題を討議し、集団としての一つの回答を決定した。その後、質問紙①を実施した。第3セッションでは、2つの下位集団をあわせて、6人集団（全体集団）を構成し、はじめに質問紙②を実施した後、同じ課題について6人での討議を行い、全体集団としての意志決定を行った。最後に質問紙③を行い、デブリーフィングを行った（図2参照）。

課題：実験に用いられた課題は「スリー・テンー誰が生き残るべきか」（柳原，1976）と題する問題を元に、本実験用に修正を加えたものである。もとの課題は、架空の状況下において、その

状況にふさわしくない人間を10名の中から3名選ぶという、正解の無いコンセンサス形成の問題である。本実験では実験時間短縮のため、初めの10名を9名に減らし、9名の中から3名を選択させた。

独立変数の操作：質問紙①の終了後、全体集団を形成する際に、実験室Aに留まる群を「移動なし条件」とし、実験室CからAに移動する群を「移動あり条件」とした。

従属変数とその測定：従属変数は、質問紙①②③の回答を使用し、分析にあたっては、3人集団の各回答の平均値を求め、それを集団の得点とし、集団を単位として分析を行った。これは、本研究で仮定したマイノリティ感・マジョリティ感が、個人として生じるものではなく、集団として発生するものとしていることによる。

1 マイノリティ感・マジョリティ感（以下 Mm 感）：
「もしも、二つの集団のどちらからか、代表者を一人選ぶとすれば、どちらの集団がよいと思いますか」、「二つの集団のうち、6人集団の時に、どちらの集団がより有力であると思いますか」、「第二セッションの後に、どちらかの3人集団が、次の話し合いに参加するならばどちらの集団がよいと思いますか」という3項目の質問に対して「自分たちの集団」「相手の集団」という2件法で回答を求め、「自分の集団」を選択した数を Mm 感とした。すなわち、値が小さければマイノリティ感が生じており、値が大きければマジョリティ感が生じていることになる。

2 成員の認知的側面：質問紙①（下位集団での決

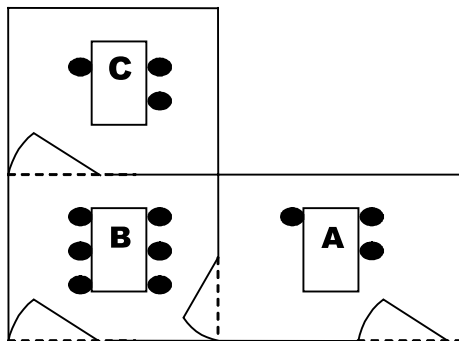


図1 実験室と実験室内の配置

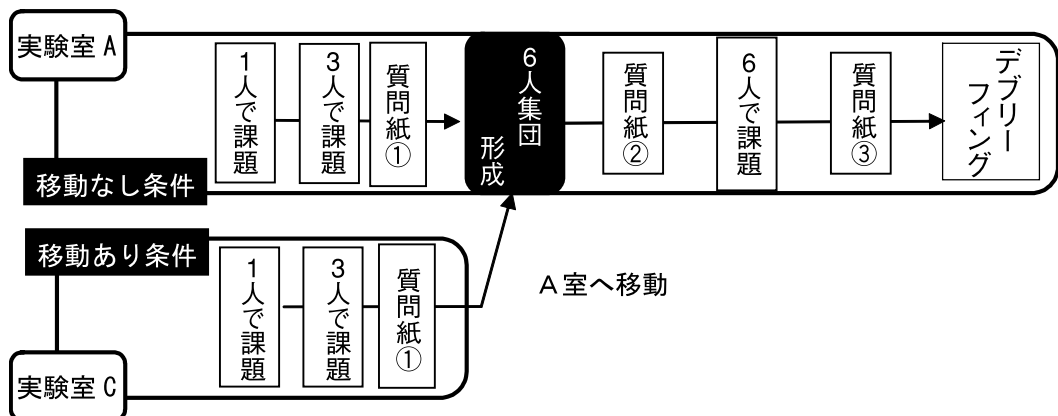


図2 実験1の流れ図

定後に実施)：3人集団での決定への満足度や貢献について「1. 全くそう思わない」から「5. 全くそう思う」までの5件法でたずねた(項目の内容は表1参照)。質問紙①は、各実験の初期条件が等質であることの確認のために行われた。質問紙②(全体集団形成後に実施)：これから始まる話し合いについて、どの程度自分たちが相手の集団に影響を与え、話し合いに満足いくと思うかなど、その予測をたずねた。具体的には「これから始まる6人集団での話し合いが一体どういうものになるであろうか」などを「1. 全くそう思わない」から「5. 全くそう思う」までの5件法でたずねた(項目の内容は表2参照)。質問紙③(全体集団での決定後に実施)：質問紙②と同じ内容を過去形にあらため、全体集団での話し合いの経験を踏まえた上での認知をたずねた。

3客観的な影響の指標(発言数・回答の一致度)：下位集団間の影響力を測定するため、全体集団での話し合い中に行われた発言数と、回答の一致度を測定した。発言数は、その長さにかかわらず、話し手が交代するまでを一つの発言として、実験者が、参加者に知られないようにカウントした。回答の一致度とは、下位集団での決定内容と、全体集団の決定内容の一致している数のことである。

結 果

下位集団間で内容が完全に一致した決定を行った集団があったためそれを除外し、各条件8集団ずつで分析を行った。

因子の抽出：実験1と実験2では、同じ質問紙を

用いており、要因操作をのぞく全ての実験手続きが同じであったため、因子分析に関しては、両実験を合わせて行った(N=96)。質問紙①をもとに、因子分析(主成分法・バリマックス回転)を行った結果が表1である。因子分析の結果、二因子が抽出され、関係満足因子と集団貢献因子と名付けた。クロンバックの信頼係数はそれぞれ $\alpha = 0.77$ 、 $\alpha = 0.64$ であった。

質問紙③をもとに、因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った結果が表2である。質問紙②と質問紙③は、同様の内容を話し合いの前後でたずねており、6人での話し合いをしたという経験的裏づけがあることから、質問紙③を基準に因子を抽出し、因子得点を算出した。その結果、3因子が抽出され、第一因子を自己有能感因子、第二因子を自集団有能感因子、第三因子を自己満足因子と名付けた。クロンバックの信頼性係数はそれぞれ、 $\alpha = 0.92$ 、 $\alpha = 0.86$ 、 $\alpha = 0.84$ であった。

移動要因の効果の検討：分析に用いた得点は集団を単位としたものであり、WilcoxonのT検定を行った。表3は各因子得点とMm感、およびその下位項目のメディアンとT検定の結果である。

質問紙①：いずれの因子においても条件間に有意な差は認められず(T=9, n.s.; T=8, n.s.)、条件間で初期状態が等質であったと言える。またいずれの得点も3.0を越えており、参加者が実験に対して真剣に取り組んでいたと言える。

質問紙②：質問紙②においては、いずれの変数も条件間で有意な差は認められなかった(表3参照)。

表1 質問紙①における因子分析の結果(バリマックス回転後の因子負荷量)

	関係満足因子	集団貢献因子
わたしは集団の決定に満足だ	0.86	0.27
集団の雰囲気は良かった	0.81	0.23
またこのような機会があれば、今の3人集団の人と一緒にしたいと思う	0.69	0.55
集団の決定は、今の自分の考えと同じである	0.66	-0.44
わたしは集団の決定に貢献した	0.03	0.73
わたしは話し合いにおいて、自由に意見を言うことが出来た	0.34	0.71
わたしの意見は集団の中で高く評価されていた	0.11	0.66
固有値	3.51	1.61
寄与率(%)	39.03	17.92
累積寄与率(%)	39.03	56.95
α 係数	0.77	0.64

表2 質問紙③における因子分析の結果（プロマックス回転後の因子負荷量）

	自集団有能感 因子	自己有能感 因子	自己満足 因子
私たちの3人集団は、6人集団での決定に貢献できた	0.94	0.42	0.58
私たちの3人集団は、6人集団の決定に関して頼りにされていた	0.90	0.32	0.44
私たちの3人集団は、6人集団の雰囲気に影響を与えることが出来た	0.82	0.31	0.39
私たちの3人集団は、話し合いにおいて自由に意見を言うことが出来た	0.75	0.39	0.51
私たちの3人集団は、6人集団の中で高く評価された	0.73	0.31	0.46
私は、6人集団での決定に貢献できた	0.38	0.90	0.40
私は、6人集団の雰囲気に影響を与えられた	0.14	0.85	0.33
私は、6人集団の中で高く評価された	0.56	0.71	0.59
私は、6人集団の決定に関して頼りにされた	0.55	0.71	0.42
私は、話し合いにおいて自由に意見を言えた	0.32	0.69	0.22
私は、6人集団の決定に満足できた	0.46	0.47	0.99
集団の決定は、自分の決定と一致していた	0.55	0.18	0.75
良い雰囲気で話し合いが行われたと思う	0.43	0.38	0.70
固有値	6.28	2.14	1.38
寄与率(%)	48.28	16.43	10.59
累積寄与率(%)	78.28	64.71	75.30
	1.00	0.41	0.56
因子間相関		1.00	0.45
			1.00
α 係数	0.92	0.86	0.84

表3 各因子得点とMm感とその下位項目のメディアンと差の検定結果（移動要因）

質問項目	移動なし	移動あり	差の有意性	
質問紙①	関係満足因子	4.00	4.33	<i>n.s.</i>
	集団貢献因子	3.67	3.89	<i>n.s.</i>
質問紙②	自己有能感因子	3.20	3.13	<i>n.s.</i>
	自集団有能感因子	3.47	3.87	<i>n.s.</i>
	自己満足因子	3.56	3.44	<i>n.s.</i>
	マイノリティ感・マジョリティ感	1.67	2.33	<i>n.s.</i>
質問紙③	自己有能感因子	3.20	3.00	<i>n.s.</i>
	自集団有能感因子	3.67	4.00	<i>n.s.</i>
	自己満足因子	4.11	3.89	<i>n.s.</i>
	マイノリティ感・マジョリティ感	2.33	1.00	0.08 [†]
客観的な影響の指標	代表者選択	2.00	1.00	<i>n.s.</i>
	有力な集団	3.00	0.00	0.06 [†]
	次への推薦	2.00	2.00	<i>n.s.</i>
客観的な影響の指標	発言数	67.00	69.50	<i>n.s.</i>
	意見採用数	2.00	2.00	<i>n.s.</i>

† $p < .10$ * $p < .05$

質問紙③：全体集団での話し合いの後に行われた質問紙③では、Mm感に有意な傾向差が認められた ($T = 3$, $p < .10$)。「有力」であったのは移動なし集団だと認知する傾向が示唆された (図3参照)。

客観的な影響の指標：下位集団間の影響力である発言数・回答採用数は、表3にあるように、移動要因による有意な差は認められなかった ($T = 8$, *n.s.*; $T = 0$, *n.s.*)。

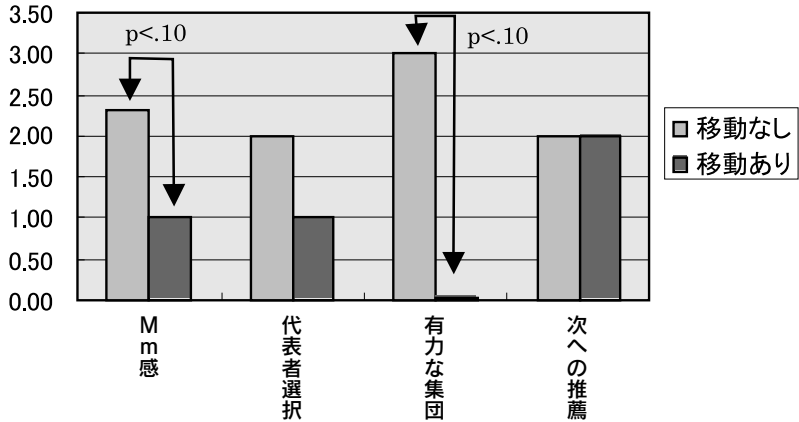


図3 移動要因による質問紙③のMm感およびその下位項目のメディアン

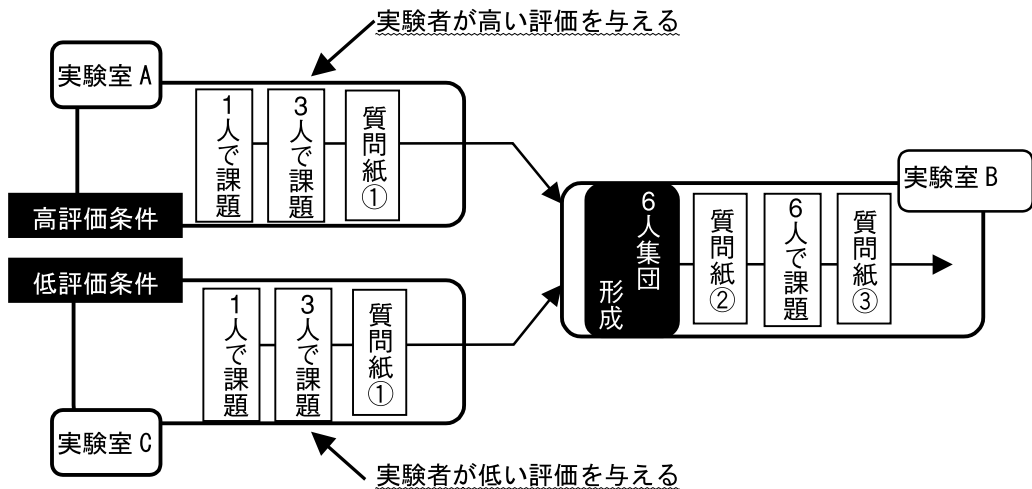


図4 実験2の流れ図

実験2—評価要因の検討—

方法

実験参加者：大学生の54名（男性24名，女性30名）を実験参加者とし（実験1とは異なった実験参加者）、3名から成る下位集団を18組形成した。

手続き：実験1と同様の手続きを行った（図4）。ただし、実験1ではA室に集合したが、実験2では移動の効果をなくするため、両集団をB室に移動させた。

独立変数の操作：下位集団課題の話し合い中に、実験者が話し合いの行われ方について、評価することにより操作を加えた。高評価条件では、「良

い話し合いができていますね」「理想的な話し合いを進めていますね」など、話し合いに対する高い評価のフィードバックを行い、低評価条件では、「話し合いが上手く進んでいませんね」「なかなか決定できませんね」など低い評価のフィードバックをそれぞれ数回行った。

結果

各条件9集団ずつのうち、1実験集団の下位集団の成員が友人同士で形成されており、初期条件である質問紙①の因子において著しく差がみられたため除外した。

評価要因の効果の検討：表4は各因子得点とMm

表4 各因子得点とMm感とその下位項目のメディアンと差の検定結果(評価要因)

質問項目		移動なし	移動あり	差の有意性
質問紙①	関係満足因子	3.92	4.17	<i>n.s.</i>
	集団貢献因子	3.95	4.17	<i>n.s.</i>
質問紙②	自己有能感因子	3.07	3.23	<i>n.s.</i>
	自集団有能感因子	3.73	3.93	0.10 [†]
	自己満足因子	3.33	3.39	<i>n.s.</i>
	マイノリティ感・マジョリティ感	2.00	2.67	0.05*
質問紙③	自己有能感因子	3.20	3.57	0.07 [†]
	自集団有能感因子	3.53	3.80	<i>n.s.</i>
	自己満足因子	4.17	4.17	<i>n.s.</i>
	マイノリティ感・マジョリティ感	0.67	2.67	0.02*
	代表者選択	1.00	3.00	0.03*
	有力な集団	0.00	3.00	0.08 [†]
	次への推薦	1.00	2.67	0.02*
客観的な影響の指標	発言数	48.00	53.00	<i>n.s.</i>
	意見採用数	2.00	2.50	<i>n.s.</i>

[†] $p < .10$ * $p < .05$

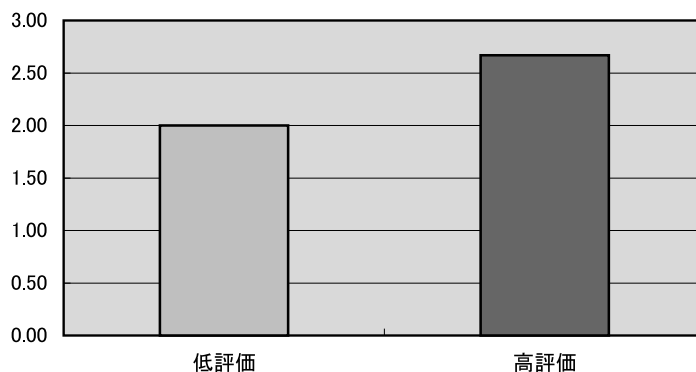


図5 評価要因による質問紙②のMm感のメディアン

感、およびその下位項目のメディアンと T 検定の結果である。

質問紙①：いずれの因子においても条件間に有意な差は認められず ($T=8$, *n.s.*; $T=10$, *n.s.*)、条件間で初期状態が等質であったと言える。またいずれの得点も3.0を越えており、参加者が実験に対して真剣に取り組んでいたと言える。

質問紙②：全体集団形成直後に行われた質問紙②は、表4にあるように、自集団有能感因子に傾向差 ($T=8$, $p < .10$)、Mm感で有意差が認められた ($T=6$, $p < .05$) (図5)。高く評価された集団は、低く評価をされた集団よりも、自集団を有能と予測し、マジョリティ感を感じていたと言える。

質問紙③：全体集団での話し合いの後に行われた質問紙③では、表4にあるように、自己有能感因子において有意な傾向差が認められ ($T=7$, $p < .10$)、Mm感に有意差が認められた ($T=3$, $p < .05$) (図6参照)。つまり、高い評価を受けた集団は、低い評価を受けた集団に比べ、自分自身に対する評価が高く、両集団とも「代表者が選出されるべき集団」「有力な集団」「次セッションへの参加集団」を高い評価を受けた集団だと考えていた。

客観的な影響の指標：下位集団間の影響力である発言数・回答採用数は、表4にあるように、評価要因による差は認められなかった ($T=6$, *n.s.*; $T=7$, *n.s.*)。

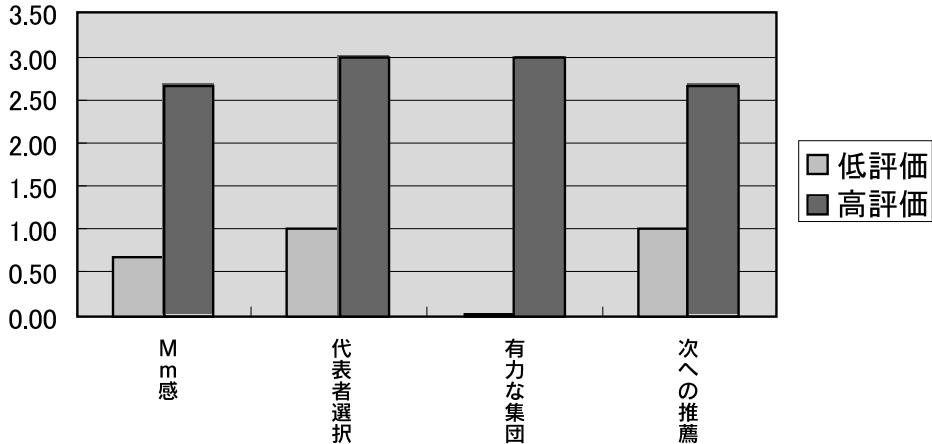


図6 評価要因による質問紙③のMm感およびその下位項目のメディアン

考察

仮説1-1の「場所を移動してきた集団は、その場にいた集団よりも、合同の話し合いの影響力が相対的に小さいだろう」は支持されなかった。しかし、仮説1-2の「場所を移動してきた集団は、その場にいた集団よりも、マイノリティ感を感じやすいであろう。反対に、その場において移動をしなかった集団は、マジョリティ感を感じるであろう」は部分的に支持された。Mm感に対する移動の効果は、全体で話し合いを行う以前（質問紙②）には認められなかった。しかし、話し合いを行った後（質問紙③）では、移動あり集団はマイノリティ感を、移動なし集団はマジョリティ感を持つに至った。これは全体集団での話し合いが開始される際に、移動なし集団はこれまでの話し合いを「再開する」という認識で行うことが可能であったのに対し、移動あり集団は、相手の集団の話し合いに参加させてもらうという認識になっていたためだと考えられる。

このことを裏づけるように、話し合いは、移動なし集団の成員が「私たちは、このように話し合いが進行し、このように決まりました。そちらはどうですか。」と、これまでの自分たちの話し合いの流れを提示して始まるが多かった。このため、話し合いの主導権が、移動なし集団にあると認知されたと考えられる。リーダーシップの機能の一つとして会議などの進行をするという機能があるが（淵上, 2002）、話し合いの流れを提示し、話し合いの主導権を握ることはリーダーの機

能を果たしていると言え、移動なし集団をより優勢な存在だと認識したものと考えられる。話し合いが始まる前（質問紙②）に、Mm感が発生していなかったのは、このような相互作用を行う前であり、流れを認識していなかったためであろう。

また、評価要因の効果を検討した結果、仮説2-1の「事前に第三者から低い評価を受けた集団は、高い評価を受けた集団よりも、合同の話し合いにおいて相対的に影響力が小さくなるだろう」は、支持されなかった。しかし、仮説2-2「事前に第三者から低い評価を受けた集団は、高い評価を受けた集団よりも、マイノリティ感を強く感じるであろう。反対に、高い評価を受けた集団は、マジョリティ感を感じるであろう」は支持された。評価要因では、移動要因の場合とは異なり、全体集団形成直後（質問紙②）から、Mm感が生じていた。その際、自集団有能感因子に傾向差が認められており、高評価条件の集団は内集団を高く評価していた。また、話し合い後（質問紙③）には、自己有能感因子に有意な差が認められており、話し合いを通じて自己有能感を得ていた。このことは、社会的アイデンティティ理論 (Tajfel and Turner, 1979; Tajfel and Turner, 1986) が指摘するような、自集団への肯定的評価による肯定的な自己アイデンティティの獲得の効果によるものと考えられる。すなわち、下位集団時の集団への評価が、自己の評価に結びつけられたと言えよう。高評価条件では、このようにしてより高い自己評価を得ることが出来、Bandura (1995) の述

べるように、より積極的な行動を試み、マジョリティ感が発生したと考えられる。

また、岡本・佐々木 (2002) の調査や、岡本・佐々木 (2003) の実験から、その場に長く留まっていた集団は、後に参入してきた集団よりも、内集団アイデンティティ (Turner, 1987) が高いことが明らかになっている。つまり、その場に長くいることによって、所属する集団からポジティブなアイデンティティを得られると考えられる。このことを踏まえれば、移動要因・評価要因のどちらの要因操作の場合も、集団を通してのアイデンティティと Mm 感が関連していると考えられよう。つまりポジティブな集団アイデンティティを得ることによってマジョリティ感が生じ、ポジティブな集団アイデンティティを得ることが出来ない時に、マイノリティ感が生じると考えられる。

またこのことに関連して、マジョリティへの同調 (Asch, 1951) や態度の一貫性が持つ影響力の強さ (Moscovici, Lage and Naffrechoux, 1969) を、集団アイデンティティとの関連から議論した研究もいくつか認められる。例えば Hogg and Abrams (1988) や Turner (1987) は、Asch 型のマジョリティへの同調実験について、その影響力は自分と同じカテゴリーに属する他者 (内集団成員) からの影響であるが故に、主観的不確かさを生じた結果であると社会的アイデンティティ理論の立場から議論している。さらに、Hogg and Turner (1985) は、マイノリティの一貫した態度が社会的影響を与えるようになるには、自己カテゴリー化が重要な役割を果たしており、そこからポジティブなアイデンティティを得られるために、マイノリティの影響が促進されると述べている。これらのことから、Mm 感と集団アイデンティティの間には関連があると言えよう。

その一方で、影響力の測度として用いられた「発言数」や「回答の一致度」に対しては移動要因・評価要因いずれの効果も認められなかった。その理由として、Mm 感がこれらの要因と影響力の媒介変数であることが考えられる。つまり Mm 感は、客観的な影響力を持つまに形成される心的状態としての役割を持っており、より長期的にこれらの要因が働きかけることによって、客観的

な影響力にも効果を与えると考えられる。たとえば、仮にポジティブなアイデンティティを得ることを阻害するような要因があった場合は、たとえマイノリティが一貫した態度をとったとしても、Mm 感が形成されえず、実質的な影響力は小さなものになると考えられる。このように、Mm 感の形成は、集団意志決定場面での同調・意見変容の一過程である可能性も考えられる。

また、そのこととは別に、客観的指標に効果が認められなかった原因として、測定方法の問題点を指摘することが出来る。回答の一致度の指標は、下位集団時と全体集団時での決定内容の一致した数であった。本研究で用いられた課題は、9名のメンバーから3名を選び出すというもので、問題の性質上、同じ人物が常に1人は含まれる結果となり、回答の散らばりが小さなものとなっていた (移動要因で $SD=0.44$ 。評価要因で $SD=0.73$)。そのため、有意な差が生じなかったことも考えられる。また、発言数は発言の数をその長短に関わらず単純にカウントしたのだが、実際には長い時間の発言と、承認や追従するだけの発言 (e.g. 「たしかにそうだよ」など) は、その発言の重みが異なっており、単純な回数だけでは影響力の指標としては不十分であったと考えられる。今後は、それらの点を改良し、より高い信頼性を確保できる課題及び測定法を選択すべきであろう。

本研究では、Mm 感の概念的妥当性や、その他の変数に与える影響、移動や評価の要因以外にどのような要因によって生じるのか、それらについて十分な検討が行われていない。今後は、現実場面への応用的な側面も視野に入れ、より詳細な調査を行う必要がある。

参考文献

- Asch, S. E. 1951 Effects of group pressure upon the modification and distortion of judgments. In H. Guetzkow (Eds.) *Groups, leadership and men.*: Carnegies Press. (岡村二郎訳 1969 集団圧力が判断の修正とゆがみに及ぼす効果。カートライト・ザンダー／三隅二不二・佐々木薫 (訳編) グループ・ダイナミックス I [第2版] 誠信書房 pp. 227-240)
- Bandura, A. 1995 Exercise of personal and collective efficacy in changing societies. In Bandura, A. (Ed.)

- Self-efficacy in changing societies*. New York: Cambridge University Press, pp. 1-45. (本明寛・野口京子監訳 1997 激動社会の中の自己効力 金子書房)
- Brown, R. 1995 *Prejudice: Its social psychology*. Oxford: Blackwell Publishers. (R. ブラウン 橋口捷久・黒川勝 (編訳) 1999 偏見の社会心理学 北大路書房)
- Brown, Jr. T. D., Van Raalte, J. L., Brewer, B. W., Winter, C. R., Cornelius, A. E. and Andersen, M. B. 2002 World cup soccer home advantage. *Journal of Sports Behavior*, **25** (2), 134-145.
- Bray, R. S., Jones, V. M. and Owen, S. 2002 The Influence of competition location on athletes' psychological status. *Journal of Sports Behavior*, **25** (3), 231-243.
- Deutsch, M. and Gerard, H. B. 1955 A study of normative and informational social influence upon individual judgment. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **51**, 629-936.
- 淵上克義 2002 リーダーシップの社会心理学 ナカニシヤ出版
- Hamilton, D. L. and Gifford, R. K. 1976 Illusory correlation in interpersonal perception: a cognitive basis of stereotypic judgments. *Journal of Experimental Social Psychology*, **12** (4), 392-407.
- Hogg, M. A. and Abrams, D. 1988 *Social identifications: A social psychology of intergroup relations and group processes*. London: Routledge. (吉森護・野村泰代 (訳) 1995 社会的アイデンティティ理論—新しい社会心理学体系化のための一般理論 北大路書房)
- Hogg, M. A. and Turner, J. C. 1985 Interpersonal attraction, social identification and psychological group formation. *European Journal of Social Psychology*, **15** (4), 51-66.
- Kipling, D. W. and Karen, B. W. 1989 Impact of source strength on two compliance techniques. *Basic and Applied Social Psychology*, **10** (2), 149-159.
- Latané, B. and Wolf, S. 1981 The social impact of majorities and minorities. *Psychological Review*, **88** (5), 438-453.
- Maass, A. and Clark, R. D. 1984 Hidden impact of minorities: Fifteen years of minority influence research. *Psychological Bulletin*, **95** (3), 428-450.
- Moscovici, S., Lage, E. and Naffrechoux, M. 1969 Influence of a consistent minority on the responses of a majority in a color perception task. *Sociometry*, **32** (4), 365-380.
- Moscovici, S. and Personnaz, B. 1980 Studies in social influence: V. Minority influence and conversion behaviour in a perceptual task. *Journal of Experimental Social Psychology*, **16** (3), 270-282.
- Mullen, B. 1985 Strength and immediacy of sources: A meta-analytic evaluation of the forgotten elements of social impact theory. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48** (6), 1458-1466.
- 野波寛 2001 環境問題における少数者の影響過程 晃洋書房
- 岡本卓也・佐々木薫 2002 集団間接触時における集団間関係と認知バイアス—神戸三田キャンパスにおける学部・学科の増設を事例にして— 日本社会心理学会第43回大会論文集, 658-659.
- 岡本卓也・佐々木薫 2003 集団間接触時における集団間関係と認知バイアス (3) —参入・既存関係におけるZSP発生と集団アイデンティティ— 日本社会心理学会第44回大会論文集, 710-711.
- Schwartz, B. and Barsky, S. F. 1977 The home advantage. *Social Force*, **55** (3), 641-662.
- Tajfel, H. and Turner, J. C. 1979 An integrative theory of intergroup conflict. In Austin, W. G. and Worchel, S. (Eds.) *The social psychology of intergroup relations*. Monterey, CA: Brooks/Cole. pp. 33-47.
- Tajfel, H. and Turner, J. C. 1986 The social identity of intergroup behaviour. In, Worchel, S. and Austin W. G. (Eds.) *Psychology of intergroup relations*. Chicago: Nelson-Hall, pp. 7-24.
- Turner, J. C. 1987 *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Oxford: Blackwell Publishers. (蘭千壽・磯崎三喜年・内藤哲雄・遠藤由美 (訳) 1995 社会集団の再発見: 自己カテゴリー化理論 誠信書房)
- 柳原光 1976 スリー・テン—誰が生き残るべきか— *CREATIVE O.D.* **Vol. 1**, プレスタイム, pp. 211-216.
- Wolf, S. 1979 Behavioural style and group cohesiveness as sources of minority influence. *European Journal of Social Psychology*, **9** (4), 381-396.

Effects of Entering and Pre-evaluation on the Sense of Minority and Majority

ABSTRACT

This study examined the sense of minority and majority that is defined, not by the number of members but by cognition of social power. In Experiment 1, to test the effects of entering, 54 participants were assigned to 18 sub-groups and then half of the sub-groups were assigned as pre-existing-groups and the rest as entering-groups. The 18 sub-groups made decisions within each sub-group. Entering-groups then joined the pre-existing-groups and the resulting 6 members-groups were engaged in the same task again. Experiment 1 showed that existing-groups had the sense of minority. In Experiment 2, to test the effects of pre-evaluation, another 54 participants were allocated to 18 sub-groups and then half were given high evaluations and others were given low evaluations during decision making as in experiment 1. Each high and low evaluated sub-group was then mingled into 9 groups to make new decisions. As a result, the high-evaluated sub-groups had the sense of majority and estimated their efficiency higher than the low-evaluated sub-groups. Entering and pre-evaluation factor had no effect on the behavioral index (number of remarks and opinion acceptance). These results suggest that there is a relationship between the sense of minority and majority and group identity.

Key Words: sense of minority, sense of majority, group decision making